

〈新刊紹介〉

斎藤倫明編

『日本語語彙論 I』

本書は、認知言語学的研究と国語学的研究を中心に構成された講座『言語研究の革新と継承』の第一巻であり、第二巻とともに日本語の語彙論研究の全体像を提示することを目的に編まれたものである。本巻では語彙論の内部に関わるテーマが取り上げられ、数量的アプローチや語彙意味論等、各章で多種多様な方法論が用いられている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「『講座 言語研究の革新と継承』刊行のことば」「『日本語語彙論 I・II』まえがき」に続き、「第一章 語彙総論（斎藤倫明）」、「第二章 語彙体系（久島茂）」、「第三章 語彙調査（鶴岡昭夫）」、「第四章 語彙の量的構成（山崎誠）」、「第五章 語形（石井正彦）」、「第六章 語の意味論（山田進）」、「第七章 語構成 人を表す接尾辞「族」の語形成と意味を中心にして（山下喜代）」、「第八章 語種（田中牧郎）」、「第九章 位相と位相差（田中章夫）」を収める。末尾に「索引」、「執筆者紹介」が付く。

（2016年6月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 322頁 3,600円＋税 ISBN 978-4-89476-667-9）

斎藤倫明編

『日本語語彙論 II』

本書は、講座『言語研究の革新と継承』の第2巻である。第1巻と異なり、語彙論と他分野との関わりをテーマとし、表記、第二言語習得、方言、通時の研究といった観点からの論考が収められている。

本書の構成は次の通りである。「『講座 言語研究の革新と継承』刊行のことば」に続き、「第一章 語彙と文字・表記（田島優）」、「第二章 語彙と文法（村木新次郎）」、「第三章 語彙と文章（甲田直美）」、「第四章 第二言語としての日本語の語彙習得と学習（秋元美晴）」、「第五章 語彙と文化（前田富祺）」、「第六章 新語・流行語（橋本行洋）」、「第七章 方言の語彙（高橋顕志）」、「第八章 語彙史（小野正弘）」を収める。末尾に「索引」、「執筆者紹介」が付く。

（2016年6月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 270頁 3,600円＋税 ISBN 978-4-89476-668-6）

斎藤倫明著

『語構成の文法的側面についての研究』

本書は、語構成と文法との関わりについて、字音形態の分析等、語構成の側面からの研究を収めたものであり、語構成論と文法論の関係についても山田文法、松下文法、橋本文法、時枝文法への検討を通して論じている。

本書の構成は次の通りである。「Ⅰ 語構成の文法的側面についての研究」では「第一部 序 語構成の文法的側面とは」に続き、「第一章 複合字音語基の分類」に「第一節 合成形式専用の複合字音語基の位置づけ」、「第二節 複合字音語基用言類の位置づけと下位分類——漢語動名詞との関わりで——」、「第三節 複合字音語基相言類の位置づけと下位分類——漢語形容動詞語幹との関わりで——」、「第四節 複合字音語基「兼用」類」、「第二章 語構成要素間に見られるヴォイスの関係」に「第一節 複合語に見られる受身的関係」、「第二節 複合語に見られる使役の関係」、「第三章 語構成と品詞——「以上」をめぐって——」に「第一節 現代語における考察」、「第二節 通時的考察——語構成史の考え方——」、「第四章 語構成と選択制限——文法と語彙の間——」を、「Ⅱ 語構成と文法論との関わり」では「第二部 序」に続き、「第一章 単語中心主義と語形成論」、「第二章 松下文法の活用論——原辞論と詞論——」、「第三章 言語単位と文法論」に「第一節 言語単位から見た文法論の組織」、「第二節 時枝文法の「句」は言語単位か——言語単位再考——」を収める。「あとがき」、「参考文献」、「初出一覧」、「索引」が付く。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第139巻として刊行された。

(2016年8月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 349頁 6,300円+税 ISBN 978-4-89476-809-3)

遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編

『談話資料日常生活のことは』

本書は、現代日本語研究会の自然談話調査に基づいて作成された談話資料と論文集である。主に首都圏在住者の日常談話の文字化資料作成・提供と、その資料の分析方法の提示を目的としている。本書の特徴として、話者間の関係性が明記された自然談話コーパスであること、幅広い年齢層を対象とすること、日本語研究のみならず日本語教育研究への活用も視野に入れて作成されていることが挙げられる。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」、「第一章 調査の概要(小林美恵子)」、「第二章 文字化の原則(佐竹久仁子)」、「第三章 日常生活における自称詞——特徴と使い分け——(小林美恵子)」、「第四章 高齢者の外来語(遠藤織枝)」、「第五章 日常会話における形容詞「すごい」の程度強調用法(孫琦)」、「第六章 直接話法におけるジェンダー表現と役割語——翻訳されたセリフという視点から——(佐々木恵理)」、「第七章 女性文末形式の使用の現在——『女性のことは・職場編』調査と比較して——(増田祥子)」、「第八章 自然談話

における「ようだ」「みたいだ」——非断定表現・婉曲表現を中心として——（中島悦子）, 「第九章 日常談話にみる確認表現「ジャナイ」「ジャン」の実相（谷部弘子）, 「第十章 日常談話にみられる敬語使用の実態（佐竹久仁子）, 「第十一章 家族の談話にみられる行為要求表現の現在（高橋美奈子）, 「第十二章 普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体——笑いが起こる場面に着目して——（高宮優実）, 「第十三章 自然談話における「そうそう」の機能（牧野由紀子）, 「第十四章 「半クエスチョン??」の諸相——20年後の考察——（斎藤理香）, 「第十五章 自然談話にみられる重なるの諸相——親しい関係の日常談話から——（本田明子）, 「おわりに」。末尾に「索引」, 「執筆者一覧」を付す。
 (2016年8月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 344頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89476-817-8)

大西拓一郎著

『ことばの地理学——方言はなぜそこにあるのか——』

本書は、初学者だけでなく他分野の研究者なども含めた幅広い層に向け、方言地理学に関するこれまでの研究の蓄積がまとめられた書である。本書には、国立国語研究所編『日本言語地図』全6巻・『方言文法地図』全6巻のほか、国立国語研究所の共同研究プロジェクトで実施された全国方言分布調査の結果や、富山大学人文学部中井精一教授研究室等との共同研究となる富山県庄川流域方言分布調査、信州大学人文学部澤木幹栄教授研究室との共同研究となる長野県伊那諏訪地方方言分布調査などといった新しい分布調査結果も取り入れられている。

本書の構成は次の通りである。序「方言はなぜそこにあるのか」に続き、「第一章 川をのぼった「言わん」の「ん」——方言と塩を運んだ川の道——」, 「第二章 もうけ話はことばを伝えない——サカイと海の道——」, 「第三章 せめぎ合いで変わった活用——山の攻防——」, 「第四章 太陽がノボラサッタ（お昇りになった）, 花がサケル（咲くことができる）——山の思考——」, 「第五章 家に「おられる」父親との隔たり——敬語と家族制度——」, 「第六章 九州と東北のタケカッタ（高かった）——人口とことば——」, 「第七章 「おら、行くだ」と「おめえ、行くずら」——「いなか」のことば——」, 「第八章 なぜ方言はあるのか」, 「第九章 ことばの地理学」。末尾に「あとがき」, 「事項・人名索引」, 「語形索引」を付す。

(2016年9月10日発行 大修館書店刊 四六判縦組み 206頁 2,200円+税 ISBN 978-4-469-21360-7)

佐佐木隆著

『上代日本語構文史論考』

本書は、『上代の韻文と散文』（2009年、おうふう）に続く八冊目となる筆者の論文集である。第Ⅰ部と第Ⅱ部から構成され、未発表の論文を五本含む。第Ⅰ部の論文においては、韻文・散文の差異と、特定の構文・表現の上代から中古にかけての考察が中心と

なる。また、第Ⅱ部においては、『古事記』『日本書紀』『萬葉集』『風土記』の本文・表現のうち個別的な問題を幅広く取り上げる。

具体的な構成は次の通り。「凡例」に続く「第Ⅰ部 一般構文論」には、「第一章 他動詞と目的語とが同族である構文——「使ひを遣はず」の類——」,「第二章 一つ他動詞が二種の目的語をとる構文——「短き物を端切る」の類——」,「第三章 二種の活用語の間に助詞がある構文——「語りし継げば」の類——」,「第四章 同じ動詞が接続助詞を介して重なる構文——「見れど見かねて」の類——」,「第五章 同じ動物を含む類似句が重なる構文——「神逐らひに逐らふ」の類——」,「第七章 ミ語法を含む散文と韻文の構文——二種の用法——」,「第八章 主格・目的格の準体句を含む構文——上代から中古へ——」。「第Ⅱ部 個別構文論」には、「第一章 已然形を含む諺の表現(Ⅰ)——めす鹿が夢合わせをした話——」,「第二章 已然形を含む諺の表現(Ⅱ)——魚が腐ってしまった話ほか——」,「第三章 「をつづ」と「うつづ」——語構成と意味——」,「第四章 「臣の子の…」という歌謡——その構成と構文——」,「付章 「言寄す」の意味と用法——「言霊」に因んで——」。末尾に「あとがき」を付す。

(2016年9月15日発行 おうふう刊 A5判縦組み 296頁 10,000円+税 ISBN 978-4-273-03789-5)

近代語学会編

『近代語研究 第十九集』

本書の構成は次の通りである。「応永本『論語抄』のことば(坂詰力治)」,「抄物における「だに」「だにも」「さへ」の用法(山田潔)」,「「ひいやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふんわり」へ——撥音史からの検討——(肥爪周二)」,「狂言台本における「気味」とその類義表現(池上尚)」,「成城〈曲章三番〉狂言本の性格と用語——「悪太郎」「鈍太郎」「花折新発知」「腰折」「臬」を通して——(小林千草)」,「江戸時代中後期狂言詞章における終助詞ナアについて——鶯流狂言保教本を中心に——(米田達郎)」,「『真草二行節用集』における研究課題——異版調査経過報告——(佐藤貴裕)」,「近世前期上方語における高程度を表す副詞の諸相と体系——「発見的な程度副詞」の台頭——(田和真紀子)」,「「どういう風の吹き回し」成立までの表現形式の諸相(鈴木丹士郎)」,「『浮世風呂』三編序文の変更に関して——吾山から半二へ——(長崎靖子)」,「夫婦の諍いから見た路女日記(大久保恵子)」,「オレかオイラか、それが問題だ——近世後期における江戸直参の自称の体系についての覚え書き——(神戸和昭)」,「江戸語・明治東京語の父母の称(小松寿雄)」,「近代漢語の初期使用の検証——初出漢語とその機能——(松井利彦)」,「『英和字彙』における振り仮名の変遷と漢語の定着(手島邦夫)」,「『官話指南総記』(明治三八年刊)の日本語——当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに——(園田博文)」,「『本文』の書き換え——北原白秋『邪宗門』の場合——(今野真二)」,「困惑(自己)から同情・配慮(他者)へ——感謝表現の発想法の変化——(田島優)」,「電車停留所名の形成と変化(鏡味明克)」,「「世間ずれ」の「誤用」について(新野直哉)」,「「活動」を「活」とする略語の史的考察——「特活」「学活」「部活」から「就活」へ、そして「婚活」およ

びその派生語へ——(橋本行洋)], 「東京語の昭和期 (田中章夫)], 「近代の東北地方出身者の文体の統計的分析——宮沢賢治・浜田広介・佐々木喜善について——(小島聡子)], 「外来語系形容動詞の名詞化——接尾辞「-さ」の下接化の諸因子——(玉村禎郎)], 「Jevons 著『Elementary lessons in logic』と『哲学字彙』の見出し語 (真田治子)], 「『明六雑誌』の一人称代名詞の分析——文語記事地の文の用例を中心に——(近藤明日子)], 「ブラウン著 *Colloquial Japanese*. とその底本 (常盤智子)], 「『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について (2) (櫻井豪人)], 「「お／ご～いたす」と「お／ご～申す」——聞き意識と受影性配慮——(伊藤博美)], 「ニコライ・レザノフ『露日辞書』にあるキリル文字で表記された日本語の特徴について (浅川哲也)], 「近世上方語研究における研究手法について——用例収集と分析・解釈——(村上謙)], 「洒落本における「いっそ」と「いっこう」(市村太郎)], 「副詞「どうせ」「どうで」の否定的評価の形成——類似表現を例にして——(林禎映)」。末尾に「執筆者略歴」を付す。

(2016年9月30日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 700頁 18,000円+税 ISBN 978-4-8386-0297-1)

築島裕著

『古辞書と音義』

本書は、全八巻からなる築島裕の著作集の第三巻であり、内容を「総論関係」, 「篆隸萬象名義」, 「本草名義」, 「和名類聚抄」, 「類聚名義抄」, 「仏典音義」, 「中世辞書」に大きく分類したうえで、発表順に掲載する。本書の校閲は土井光祐が行った。

本書の構成は次の通りである。「古辞書入門」, 「辞書」, 「中古辞書史小考」, 「辞書史と片假名」, 「古辞書における意義分類の基準」, 「訓点資料と古辞書音義」, 「漢文訓讀と古辞書の古訓点」, 「高山寺藏本『篆隸萬象名義』」, 「本草和名の和訓について」, 「和名類聚抄の和訓について」, 「圖書寮本類聚名義抄と和名類聚抄」, 「類聚名義抄の研究史をめぐって」, 「類聚名義抄の倭訓の源流について」, 「國語史料としての圖書寮本類聚名義抄」, 「改編本系類聚名義抄の成立時期について」, 「改編本系類聚名義抄逸文小見」, 「叡山文庫天海藏『蘇悉地羯羅經略疏』建久点に見える類聚名義抄の逸文」, 「金剛三昧院所藏大日經疏聞書に見える類聚名義抄逸文」, 「大般若經音義諸本小考」, 「故岡井慎吾博士藏大般若經音義管見」, 「石山寺一切經藏本大般若經音義解」, 「來迎院如來藏本大般若經音義解題」, 「題真興撰大般若經音訓について」, 「無窮會本大般若經音義のオ・ヲの假名遣について」, 「無窮會本系大般若經音義附載の篇立音義について」, 「薬師寺と大般若經音義」, 「宮内廳書陵部藏四分律音義 解題」, 「醍醐寺藏孔雀經音義二種 解題」, 「大東急記念文庫藏金光明最勝王經音義 解題」, 「法華經音義について」, 「東京大學國語研究室藏法華經音義三種 解題」, 「法華經單字の和訓について」, 「東洋文庫藏字鏡 (世尊寺本) 解題」, 「尊經閣文庫所藏『溫故知新書』解説」, 「尊經閣文庫所藏『童蒙頌韻』解説」。

(2016年9月30日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 762頁 20,000円+税 ISBN 978-4-7629-3623-4)

小林千草著

『幕末期狂言台本の総合的研究 大蔵流台本編』

本書は、幕末期の台本集成であり、大蔵流・和泉流・鷺流の三グループの台本群を成す成城大学図書館蔵『狂言集』に関する、筆者のこれまでの研究論文を一書にまとめたものである。

本書の構成は次の通りである。「第Ⅰ部 幕末期狂言台本の書誌的研究と日本語学的・表現論的研究」には、「第一章 成城本「柿山伏」の書誌と考察」、「第二章 成城本「鏡男」「鬼瓦」の書誌と考察」、「第三章 成城本「悪太郎」の書誌と考察」、「第四章 成城本「老武者」の書誌と考察」、「第五章 成城本「骨皮」「墨塗」の書誌と考察」、「第六章 成城本「武悪」の書誌と考察」、「第七章 成城大学図書館蔵『狂言集』のうちの大蔵流台本の資料的位置づけと言語状況」。「第Ⅱ部 幕末期大蔵流狂言台本の翻刻」には、「凡例」に続いて第Ⅰ部に取り上げられた狂言台本の翻刻が付される。続いて「第Ⅲ部 成城本狂言「武悪」総索引」。末尾に、「あとがき」と「巻末索引（第Ⅰ部より。第Ⅱ部、第Ⅲ部は曲名のみ採録）」を付す。

(2016年10月3日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 312頁 3,800円＋税 ISBN 978-4-7924-1435-1)

高橋忠彦・高橋久子・古辞書研究会編著

『いろは分類体辞書の総合的研究』

本書は、国立国会図書館蔵『色葉字尽』・東京大学文学部国語研究室蔵『伊呂波集』および、新出資料の高橋家蔵『色葉字』の三本を初めて影印に付し、翻字・総合索引と研究論文十三本を掲載した書である。高橋本色葉字を中心に据えながらも、色葉字類全体に関する論考を取め、中世古辞書研究における新境地を開く。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」(高橋忠彦・高橋久子)、「影印」の章には「国会本色葉字尽影印」と「国会本色葉字尽書誌」、「東大本伊呂波集影印」と「東大本伊呂波集書誌」、「高橋本色葉字影印」と「高橋本色葉字書誌」。「翻字」の章には、「国会本色葉字尽翻字本文」と「国会本色葉字尽翻字本文凡例」、「東大本伊呂波集翻字本文」と「東大本伊呂波集翻字本文凡例」、「高橋本色葉字翻字本文」に、「高橋本色葉字翻字本文凡例」、「高橋本色葉字本文 校訂・通用・異表記その他」、「高橋本色葉字割記」が含まれる。「索引」の章には、「三本総合語彙索引」と凡例、「三本総合漢字索引」と凡例および漢字索引部首索引が含まれる。「研究」の章には、十三の論文が添えられる。「色葉字総論(高橋忠彦・高橋久子)」、「国会本色葉字尽について(李妍)」、「東大本伊呂波集について(石和田理沙)」、「高橋本色葉字について(望月敬子・中原友美子・高橋久子)」、「運歩色葉集について(島田栄子・高橋久子)」、「猪無野本色葉集について(小池一恵・石和田理沙)」、「北野本色葉集について(戸谷順子・高橋久子)」、「色葉字その他の諸本(山口純

礼・市川加奈・佐々木倭子)、「倭玉篇と高橋本色葉字(鈴木功眞)」、「日葡辞書と高橋本色葉字(近藤健次・高橋忠彦)」、「天理本和名集と高橋本色葉字(市川加奈・村田隆太郎)」、「高橋本色葉字の動詞の様相(中原友美子)」、「高橋本色葉字の漢字語の位相(具香・劉瀟雅・高橋忠彦)」。末尾に「研究協力者一覧」を付す。

(2016年10月16日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 1256頁 23,000円+税 ISBN 978-4-8386-0299-5)

仁田義雄著

『文と事態類型を中心に』

本書は、筆者の最近の論考をもとにまとめられた、文や文の命題内容と事態の意味的類型に関する書である。研究の進んでいる動詞文とそれに関連する考察は扱わず、形容詞文・名詞文や状態・属性を表す文の考察が中心となる。

本書の構成は次の通りである。「第一部 文とモダリティを中心に」には、「第一章 文について」、「第二章 文の種類をめぐって」、「第三章 モダリティについて」、「第四章 述語をめぐって」。「第二部 命題の意味的類型との関わりにおいて」には、「第五章 命題の意味的類型への概観」、「第六章 状態をめぐって」、「第七章 属性を求めて」、「第八章 形容詞文についての覚え書」、「第九章 名詞文についての覚え書」、「第十章 名詞の語彙——文法的下位種への一つのスケッチ——」。「第三部 命題と文法カテゴリーの相関をめぐって」には、「第十一章 事態の類型と未来表示」、「第十二章 モダリティと命題内容との相関関係をめぐって」。末尾には、「あとがき」と「索引」が付される。なお、「あとがき」には、本書の諸章と初出の論考との関連が記される。

(2016年10月21日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 382頁 4,600円+税 ISBN 978-4-87424-709-9)

工藤浩著

『副詞と文』

本書は、副詞の機能システムと文の叙法形式の相互関係を論じた論文集である。著者の過去の論文のうち1974年から2011年までの十四本がA～Dの章に振り分けられて掲載されている。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」のあと、「A 副詞論から《かざし》論へ」には、「叙法副詞の意味と機能」、「評価成分をめぐって」、「限定副詞の機能」、「程度副詞をめぐって」、「[どうしても]考」、「[たった]は副詞か連体詞か」、「[もし線路に降りるときは]という言い方」、「[書評] 渡辺実著『国語意味論——関連論文集——』」。「B 「はきだめ」の逆襲と再生と」には、「[情態副詞]の設定と「存在詞」の存立」、「山田文法批判ぬきがき」、「日本語の文の時間表現」。「C 文から《叙法性》へ」には、「現代日本語の文の叙法性 序章」、「文の機能と叙法性」、「こと-ばの かた-ちの こと」。「D みとり図2葉」には、「1 語と文の組織図」、「2 動詞述語のパラダイム」。末尾に「初

出一覧：出版刊行順 配列」を付す。

(2016年10月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 298頁 4,800円+税 ISBN 978-4-89476-788-1)

長崎靖子編著

『大東急記念文庫所蔵 式亭三馬自筆『雑記』影印と翻刻』

本書は、大東急記念文庫所蔵式亭三馬自筆『雑記』を高解像度で撮影した影印を翻刻と併載し、筆者の解説と論考を添えた研究書である。通常翻刻とともに字母翻刻、『式亭雑記』の内容に対する注が付されている。本書は科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究 課題番号2558099）「式亭三馬の言語描写における三馬蔵書の影響」の研究成果の一部である。

本書の構成は次の通りである。「影印・翻刻編」には、「凡例」、「影印と翻刻」、「注」、「字母翻刻」。「解説・研究編」には、「第一章 『式亭雑記』の書誌」、「第二章 『式亭雑記』諸本に関して」、「第三章 慶應義塾図書館所蔵『式亭雑記』」、「第四章 『式亭雑記』「風俗」の記述に関して」、「第五章 自筆本『式亭雑記』の言語資料としての可能性」、末尾に、「結びにかえて」を付す。
(2016年10月25日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 400頁 11,000円+税 ISBN 978-4-8386-0298-8)

大木一夫・多門靖容編

『日本語史叙述の方法』

本書は、2013年日本語学会秋季大会シンポジウム「日本語史はいかに叙述されるべきか」における議論に端を発し、様々な観点から日本語史叙述の方法を問い直す論文集である。当時のシンポジウム登壇者以外の論考も加え、まとめられた。

本書の構成は以下の通りである。「はじめに」、「言語史叙述の構造（大木一夫）」、「行為要求表現「～なさい」の成立に関する一考察——日本語史記述における「視座」の確認——（福島直恭）」、「文法変化の方向と統語的条件（小柳智一）」、「音韻史——拗音をめぐる2つのストーリー——（肥爪周二）」、「ハ行子音の脱唇音化——個別言語の特色と音韻史——（高山知明）」、「言語史叙述と文字・表記史叙述——その共通点と相違点——（矢田勉）」、「古代日本語書記史の可能性（乾善彦）」、「日本語文法史の再構をめざして——「二段活用的一段化」を例に——（青木博史）」、「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究（矢島正浩）」、「日本語史叙述の方法——語彙史——（小野正弘）」、「語史研究の方法（鳴海伸一）」、「文体史はいかに可能か（山本真吾）」、「歌の表現史——萬葉集と古今集——（多門靖容）」。「あとがき」、「執筆者一覧」、「索引」を付す。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第142巻として刊行された。

(2016年10月27日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 344頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-797-3)

早津恵美子著

『現代日本語の使役文』

本書は、現代日本語の使役文の文法的な性質を全体的に明らかにすることをめざしたものである。受身文や他動詞化といった関連諸現象も射程に含め、使役文の多岐にわたる性質を総合的・実証的に論じている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「Ⅰ 序論」に「第一章 本書の課題および立場と方法」, 「Ⅱ 使役文の構造」に「第二章 使役文の意味分類の観点について 山田孝雄(1908)の再評価」, 「第三章 意志動作の引きおこしを表す使役文の文法的な意味 「つかいだて」と「みちびき」」, 「第四章 〈人ノN [部分・側面] ヲ Vi [無意志] - (サ)セル〉型の使役文 無意志動作の引きおこしを表す使役文」, 「第五章 〈人I ガN [(人Iノ)部分・側面] ヲ Vi- (サ)セル〉型の使役文 再帰構造の使役文」, 「第六章 〈N [事物] ニN [事物] ヲ Vt- (サ)セル〉型の使役文 事物の変化の引きおこしを表す使役文」, 「Ⅲ 使役文のヴォイス性」に「第七章 「ヴォイス」としての使役 主語が動きの主体か否か」, 「第八章 使役文と原動文の似通い 動きの主体か引きおこし手かの違いの弱まり」, 「第九章 使役文と受身文の似通い 動きの引きおこし手が被り手かの違いの弱まり」, 「Ⅳ 「V- (サ)セル」の使役動詞性とその変容」に「第十章 「もたせる」における使役動詞性と他動詞性」, 「第十一章 「知らせる」「聞かせる」における使役動詞性と他動詞性」, 「第十二章 「V- (サ)セル」の語彙の意味の一単位性」, 「第十三章 使役動詞条件形の後置詞への近づき 使役主体の不特定性と使役文の性質」, 「第十四章 「感じさせる」「思わせる」の判断助辞への近づき 動作主体の不特定性と使役文の性質」, 「Ⅴ 結論」に「第十五章 使役文と使役動詞 ヴォイスとしての使役文と動詞としての「V- (サ)セル」」を収める。末尾に「参考文献」, 「出典一覧」, 「既発表論文との関係」, 「あとがき」, 「索引」が付く。

なお、本書は、JSPS 平成 28 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（課題番号 16HP5060）による助成を受け、ひつじ研究叢書〈言語編〉第 140 巻として刊行された。（2016 年 10 月 27 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 464 頁 7,200 円+税 ISBN 978-4-89476-810-9）

石塚晴通監修、高田智和・馬場基・横山詔一編

『字体と漢字情報』

本書は、石塚晴通編『漢字字体史研究』（勉誠出版、2012 年）の第二巻として刊行された。2015 年 11 月に開かれたシンポジウム「字体と漢字情報——HNG（漢字字体規範史データベース）公開 10 周年記念——」における研究発表論文に若干の関係論文を加え、漢字字体史研究を多角的に論じた研究書である。

本書の構成は次の通りである。「序論—字体と漢字情報（石塚晴通）」, 「第一部 字体

論と字体意識」には、「草体漢字と字体標準（山田健三）」、「字体の定義からみる字体表・字体一覧、字体画像データ（佐藤栄作）」、「誤字と漢字教育の関係性（岡崎裕剛）」、「字体規範意識のデータサイエンス——字体選好の地域差を探る——（横山詔一）」。「第二部 字体史研究」には、「初唐の標準字体の再検討（斎木正直）」、「漢字字体規範史データベースから見た『新訳華嚴經音義私記』の字体（賈智）」、「歴史的な文字分析と字体情報——木簡の事例収集と分析——（井上幸・方国花）」、「近世から近代日本における異体字使用の変化（山下真里）」、「漢字字体規範史データベース」の利用——「フレッシュマンセミナー」の単漢字報告——（萩原義雄）」。「第三部 字体のデジタル記述」には、「CHISEによるHNGデータ収録の試み（守岡知彦）」、「コーパス構築における字体の問題とその処理（須永哲矢・堤智昭）」、「『人情本コーパス』の表記情報アノテーション（藤本灯・高田智和）」、「非漢字系日本語学習者の漢字学習の支援を目指す漢字構造記述（ガリーナ ヴォロビヨワ・ヴィクトル ヴォロビヨフ）」、「SAT大蔵経データベースをめぐる漢字情報（永崎研宣）」。「第四部 歴史的な文字の経験知の共有資源化」には、「歴史的な文字に関する経験知・暗黙知の蓄積と資源化の試み（馬場基）」、「歴史的な文字分析の視点をめぐって（宮崎肇）」、「歴史的な文字に関する経験知のデータ化と共有手法（高田祐一）」、「デジタル技術による分析と経験値の融合にむけて——文字の数値的分析技術から見た可能性——（未代誠仁）」。「第五部 文字データベースと連携」には、「漢字字体と文献の性格との関係——『漢字字体規範史データベース（石塚漢字字体資料）』の文献選定——（石塚晴通・高田智和）」、「平安時代漢字字書総合データベース構築の方法と課題——『類聚名義抄』を中心にして——（池田証壽）」、「開成石経と拓本文字データベース（安岡孝一）」、「文字画像データベースの連携について（井上聡）」、「文字データベース連携の課題（山田太造）」。末尾に「あとがき（高田智和・馬場基・横山詔一）」、「執筆者一覧」を付す。

（2016年11月7日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 440頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-585-28029-3）

福田嘉一郎・建石始編

『名詞類の文法』

本書は、動詞と比べると未だ未開拓の領域も多い名詞類を対象とした研究を取めた論文集であり、益岡隆志氏の神戸市外国語大学退職記念に代えて編まれたものである。

本書の構成は次の通りである。「序」に続き、「第Ⅰ部 名詞句の構造」に「第一章 近代語から現代語における名詞修飾に関わる言語変化についての一考察——1項名詞に前接する限定詞を例に——（庵功雄）」、「第二章 日本語同格名詞句についての一考察——固有名詞が含まれる場合——（眞野美穂）」、「第三章 [一つ＋の＋NP]と[NP＋の＋一つ]——名詞文の述語名詞句での用法に関する考察——（坂本智香）」、「第四章 指示詞の用法を持つ名詞修飾表現研究——コーパスを使った「問題の」・「例の」・「あの」の分析——（建石始）」、「第Ⅱ部 名詞類の特殊相」に「第五章 直接引用しか許さない引用形式——引用名詞類の日英対照研究——（山口

治彦)、「第六章 準体句とモダリティの関係をめぐる——中古語の実態——(高山善行)」、
 「第七章 ネットワーク語における = gu kha: 文とノダ文(松瀬育子)」、
 「第八章 敬語表現と名詞指向性——日本語と朝鮮語の対照言語学的研究——(塚本秀樹)」、
 「第三部 名詞類の統語現象」に「第九章 主題に現れる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈(福田嘉一郎)」、
 「第十章 引用形式を用いた提題文の主題名詞句と叙述の類型——「といえ、といったら、という」とを中心に——(岩男考哲)」、
 「第十一章 「ウナギ文」再び——日英語の違いに着目して——(金水敏)」、
 「第十二章 叙述の類型と名詞文の構造(益岡隆志)」の各論文を収める。「あとがき」、「索引」、「執筆者紹介」が付く。

(2016年11月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 248頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-717-4)

青木博史著

『日本語歴史統語論序説』

本書は、名詞と関連現象を中心とした日本語史上の重要な文法現象を対象に、統語論的なアプローチからの研究を取めたものである。文法史研究における文献資料を基盤とした帰納的な方法論だけでなく理論的研究も重視し、現代日本語や他言語の研究成果に基づいた理論的研究の援用まで射程に含めている点が特徴的である。

本書の構成は次の通りである。「序章 歴史統語論の方法」に続き、「第一章 名詞の機能語化」、「第二章 述部における節の構造変化と文法化」、「第三章 「句の包摂」と文法化」、「第四章 文法化と主観化」、「第五章 項における準体句の歴史変化」、「第六章 述部における名詞節の歴史」、「第七章 接続助詞「のに」の成立」、「第八章 条件節における準体助詞「の」」、「第九章 終止形と連体形の合流」、「第十章 「こと」の機能」、「第十一章 原因主語他動文の歴史」、「第十二章 ミ語法の構文的性格」、「第十三章 複合動詞の歴史」、「第十四章 ケル型複合動詞の史的展開」、「終章 まとめと今後の課題」を収める。末尾に「参考文献」「使用テキスト」「あとがき」「索引」が付く。本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第145巻として刊行された。

(2016年11月11日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 268頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-834-5)